KAZUMOちゃんと学ぼう！



留萌の港づくりに生涯(しょうがい)を捧(ささ)げた

五十嵐億太郎(いがらしおくたろう)

目次

はじめに 1

億太郎生まれる 3

C・S・メークの調査 15

新市街地造成計画 19

国会への請願 23

築港運動の継続と綱治の遺言 27

増毛との争奪戦 33

鉄道建設 41

大留萌建設事業と町債問題 45

留萌鉄道桟橋会社の設立 58

億太郎死す 65

余録 70

おわりに 76

いがらしおくたろうものがたり

五十嵐億太郎物語



はじめに

みなさんは、千望台から留萌の町と港を見おろすように立っている銅像を見たことがありますか。

この銅像の人は、「五十嵐億太郎」といいます。

留萌の先輩たちが明治から昭和にかけて、現在の留萌の基礎を作るために働きました。

留萌の港や鉄道留萌線は、これらの人たちの熱烈な運動のおかげでできたのです。

この人たちの先頭に立っていたのが、五十嵐綱治、億太郎親子でした。

億太郎は、留萌に多くの功績を残したことから、昭和25 年（1950）に留萌市の特別功労者(※1)として表彰されています。

彼らの留萌に果たした功績を後の時代に受け継いでいくために、億太郎の人生の足跡をふり返ってみましょう。



五十嵐億太郎像



この銅像のこと、みんなも
知っているはずだMO～！

※1　特別功労者
留萌市の発展につくし、郷土の誇りとすることができる方。

億太郎生まれる

億太郎は、明治６年（1873）に現在（げんざい）の青森県下北半島にある風間浦村下風呂（かざまうらむらしもふろ）で佐賀庄四郎（さがしょうしろう）の五男として生まれました。



下北半島の地図　下風呂、大畑の位置

下風呂は津軽海峡に面し、下北半島の斧の形の峰(※2)の中央にあり、対岸には手が届きそうな北海道がはっきりと見えます。

古くから温泉があり、現在も温泉地として賑わっています。



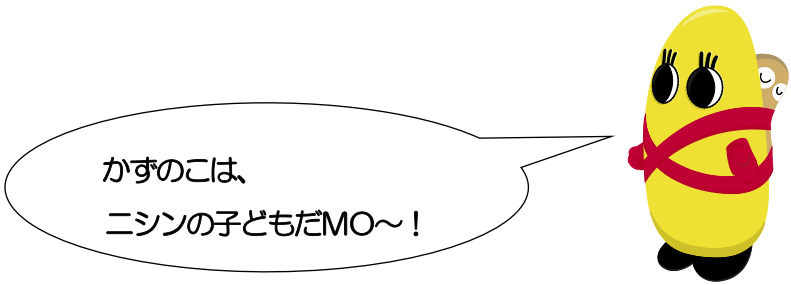
億太郎の生地　現在の下風呂の様子

※2　峰
刃と柄のついた部分をつなぐ部分。

佐賀家は九州佐賀の出身で、江戸時代の初めに下北に移り住みました。

代々下風呂に住み、天保年間に南部盛岡藩から名字をなのることと刀を差すことが許され、「藩の仕事を任される商人」の指定を受けていた、下北半島でも由緒ある家柄です。

留萌には、佐賀家八代平之丞が弘化元年（1844）に礼受にニシン漁場(※3)を開き、昭和 32 年（1957）まで、113 年間ニシン漁を続けていました。



※3　ニシン漁場
獲ったニシンを加工する場所。

現在、国指定史跡(※4)「旧留萌佐賀家漁場」として保存されている場所です。



留萌市礼受町　国指定史跡　旧留萌佐賀家漁場

億太郎の父庄四郎は、八代平之丞の実の弟で、兄の仕事を助け、留萌の礼受の漁場の責任者を務めていました。

※4　史跡

貝塚、集落跡、城跡、古墳などの遺跡のうち歴史・学術上価値の高いものを指し、国や自治体によって指定される。

６才になった億太郎は、明治 12 年（1879）に五十嵐綱治の養子(※5)になります。

五十嵐家は、江戸時代ルルモッペ場所（留萌）の場所請負人(※6)であった栖原家の持ち船の船長を務めた家で、栖原家と同じく紀州（現在の和歌山県）出身だといわれています。

栖原家は、紀州から千葉の九十九里浜でイワシ漁をし、その後、江戸に木材問屋を開き、南部桧の産地であった下北半島の大畑（現在のむつ市大畑町）に進出し、ここを本拠地として蝦夷地（現在の北海道）との関係を深めていきました。

※5　養子
　血のつながらない子どもをもらって、自分の子どもとして育てた子。
※6　場所請負人
　江戸時代に藩主などから交易の権利を請けおった商人。

五十嵐家も大畑に本拠をおき、栖原家と共に北方の開発に乗り出したと思われます。

そこで、佐賀家やルルモッペ場所の支配人を務めた相馬家と関わりを持ったのでしょう。

父綱治の母親は相馬四郎兵衛の妹で、絶えていた五十嵐家を再興し(※7)、寅蔵を養子に迎えて綱治を生んでいます。



五十嵐綱治

また、明治 11 年（1878）には、億太郎の 14 才上の姉スワが綱治と結婚しています。

※7　再興

一度無くなった家を再び作ること。

億太郎が五十嵐家の養子になったときから、栖原家、佐賀家、相馬家という三つの家が後ろ盾(※8)となったのです。

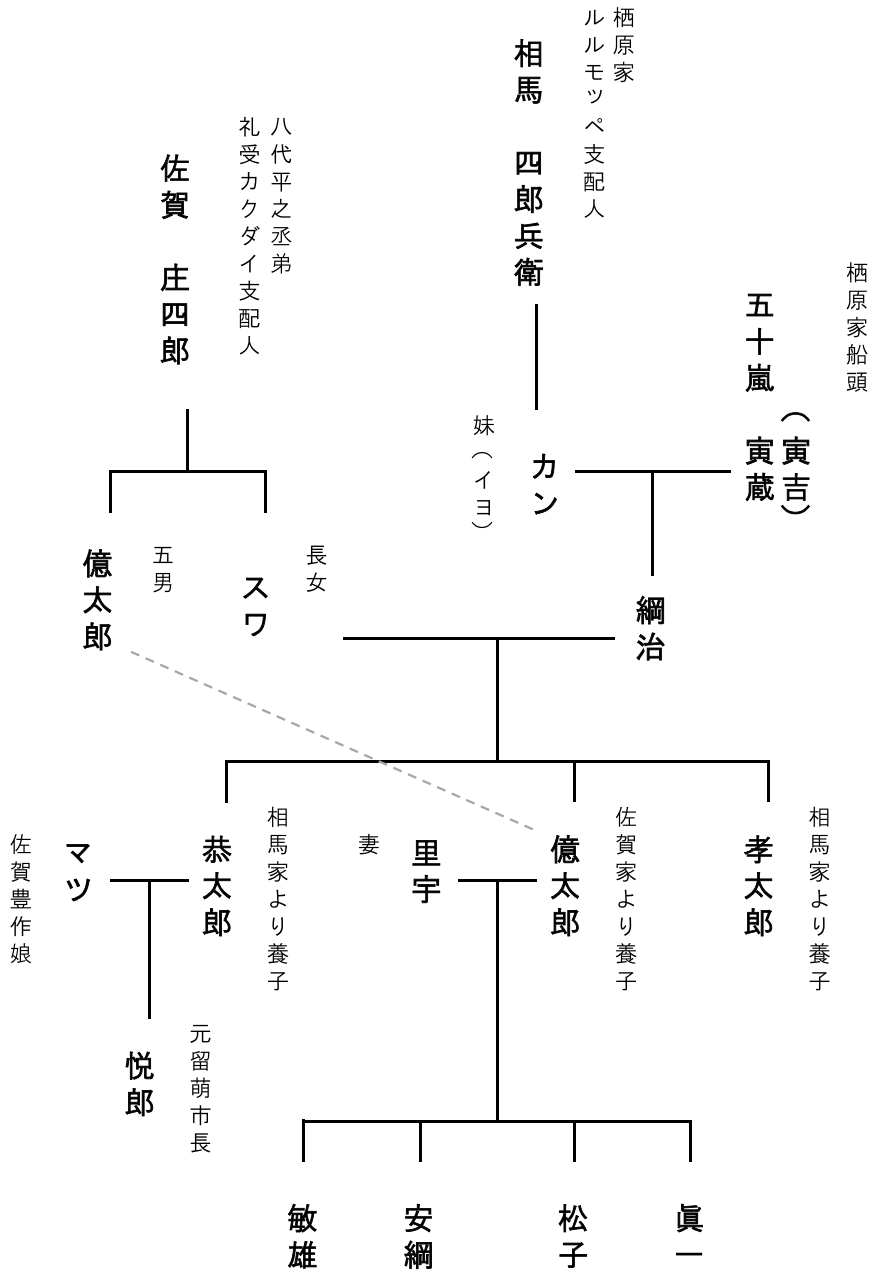
明治 13 年(1880)に億太郎は大畑小学校に入学します。

ちょうどこの年に綱治が栖原家から独立し、留萌でニシン漁業を始め、徐々に本拠を留萌に移していきます。

明治 16 年（1883）に大畑小学校を卒業すると、それを待っていたかのように五十嵐家は大畑から留萌村に戸籍(※9)を移します。

※8　後ろ盾
陰で力を貸し、助けること。

※9　戸籍
戸とよばれる家族をさす単位。



五十嵐家家系図（かけいず）

明治 13 年（1880）からの３年間は、大畑の五十嵐家や相馬家で暮らしていたと思われます。

毎年、春先になると、大畑の港から北海道の漁場に出稼ぎに出て行く父たちの乗った船を見送り、いつかは自分も北海道へ渡って父を助けてやろうと思ったことでしょう。

小学校を卒業してから数年間、億太郎がどこで何をしていたのかは、はっきりしていません。

明治 22 年（1889）、16 才になった億太郎は、東京にあった商売の経理をするための商業簿記(※10)を教える豊国学校を卒業し、翌年には水産伝習所（現在の東京海洋大

※10　簿記
　お金や物の出入りを記録する方法。

学）に進学し、新しい漁業や加工技術を開発するための知識を身につけるために勉強します。

億太郎は第３期生で、同期の卒業生は 20 名でした。

科目は、漁労(※11)、製造(※12)、増殖(※13)などの漁業関係や、応用化学(※14)、英語、気象学(※15)などがありました。

その他に実習があり、千葉の海岸でカツオの地引き網(※16)を見学するなどの体験をしています。

※11　漁労
魚を獲ること。
※12　製造
物を作ること。
※13　増殖
魚などを増やすこと。
※14　応用化学
化学の理論を、生活に応用する学問。
※15　気象学
地球の大気で起こる気象に関する学問。
※16　地引き網
陸を拠点に沖合へ網を廻し、網の両端につけた引き綱を引き揚げる漁法。

この時代、東京にいて一生懸命勉強すると共に、北海道東京事務所の人たちや色々な人たちと知り合いになり、その後の億太郎の活動に影響を与えたものと考えられます。


第貳拾五號
卒業證
北海道平民
五十嵐億太郎
水産傳習所規定ノ學科ヲ
修メ卒業セシコトヲ證ス
明治廿四年十月十五日
大日本水産會水産傳習所長
從六位勲四等關澤明清

水産伝習所卒業證

明治 24 年（1891）、18 才になった億太郎は水産伝習所を卒業すると、一時大畑に帰省します。



現在の大畑川河口

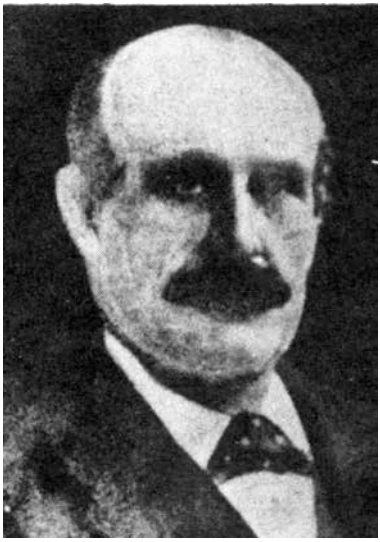
その年に留萌と彼の人生にとって重大な運動が始まります。留萌に港を作る運動です。

一人のイギリス人技術者の報告が、五十嵐家の運命を決めたのです。

C・S・メークの調査

明治 19 年（1886）開拓使(※17)にかわって北海道庁がつくられ、北海道を開拓するための調査が始まります。

翌年、北海道の開拓に必要な港を作る場所を選ぶために、イギリスより招かれた外国人技術者 C・S・メークが全道の沿岸を調査して歩きました。



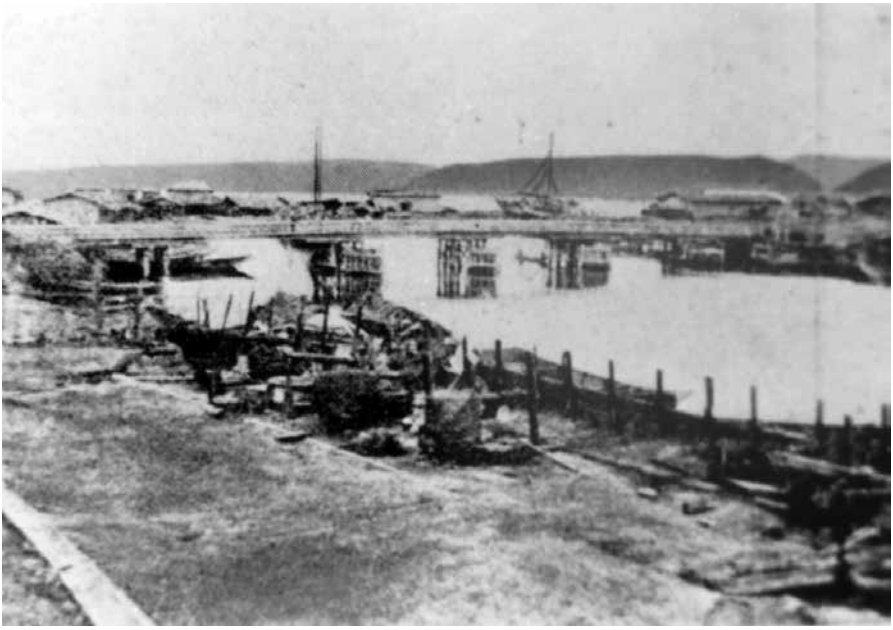
C・S・メーク

チャールズ・スコット・メーク。1853 年イギリスロンドン生まれ。17 才で職人として土木工事に関わり、30 才でシャープ技師のもとで河岸改良工事などの助手をし、その後、トーマス卿のもとで鉄道、橋の設計・測量をし、港湾関係のメッサージ商会に勤務。34 才の時、日本政府港湾河川技師長として日本に来た。1890 年帰国、その後も港湾、ドッグなどの設計を手がけ、1923 年 70 才で死去。

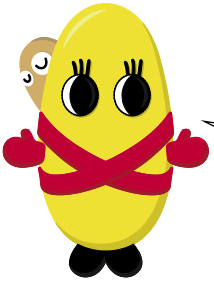
※17　開拓使

北海道開拓のために明治政府がおいた最初の役所。

当時人口が 300 人ほどの小さな村であった留萌も通っています。



築港前の留萌川河口



昔の河口は、
こうなっていたんだMO～！

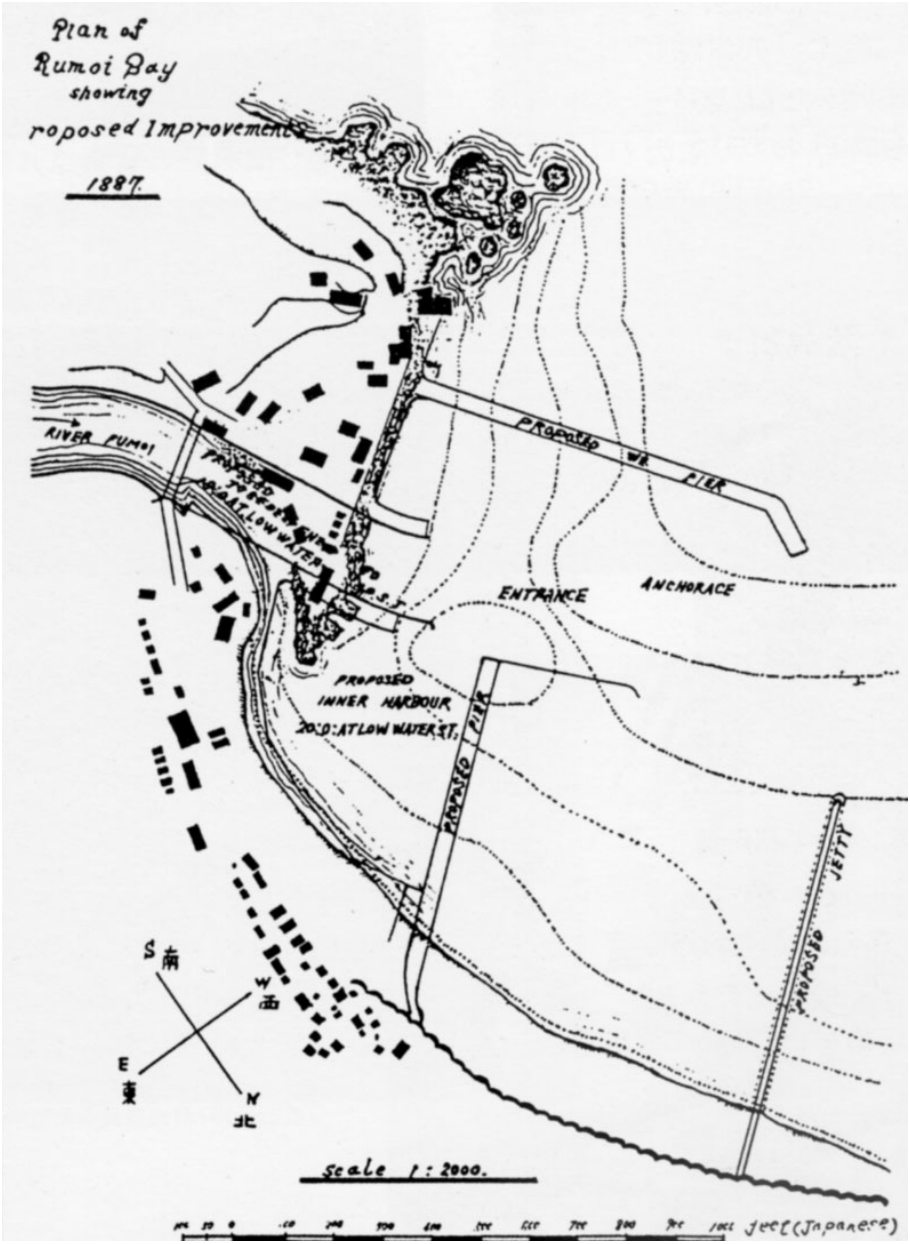
そして、次のように報告(ほうこく)しています。

「私は西海岸にやってきました。すでに参考資料(しりょう)で知っていたとおり、天塩沿岸(てしおえんがん)に唯一(ゆいいつ)の港らしい大きな港があることを知りました。その留萌が自然に恵まれた優位な位置と交通上の位置から考えても非常(ひじょう)に有望(ゆうぼう)な場所にあり、私が最初に報告書(ほうこくしょ)で指摘(してき)したとおり、天塩(てしお)と石狩(いしかり)の間で商港(※18)としての条件(じょうけん)を備(そな)えている留萌に匹敵(ひってき)する場所はないと強調したい。」

この報告(ほうこく)が、留萌の人たちに留萌に港を作るという大きな希望を抱(いだ)かせることとなったのです。

ちなみに、メークの一行(いっこう)が留萌で宿泊(しゅくはく)したのは五十嵐家だったといわれています。

※18　商港
船を使って、荷物を行き来させる貿易港(ぼうえきこう)。



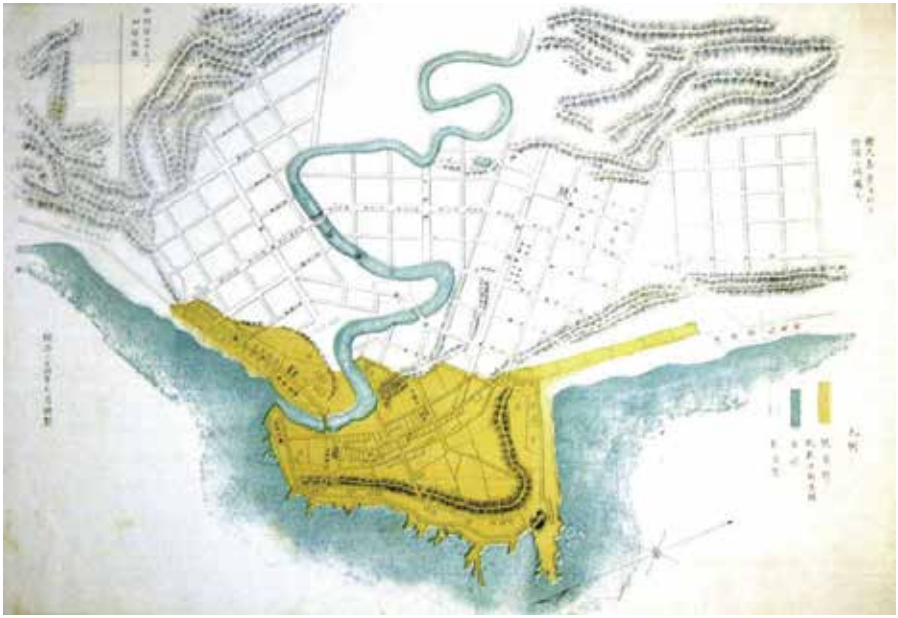
C・S・メークの考えた留萌港設計図（るもいこうせっけいず）

新市街地造成計画

明治18年（1885）頃から、留萌の将来のため新市街地造成計画(※19)が、留萌村有志(※20)の間で積極的に議論(※21)され、以前増毛郡書記(※22)をしていた中城長直を中心に北海道庁へ手続きを行っていましたが、取り合ってくれませんでした。

しかし、明治21年（1888）に郡長一柳平太郎が北海道庁に行った時、よい感触を得たことから、明治23年(1890)に留萌新市街開削組合(※23)を作り、本格的な運動を始めました。

※19　新市街地造成計画
　新しい町を作るための計画。
※20　有志
　一緒に何かをしようとする気持ちのある人。
※21　議論
　意見を出し合い話し合うこと。
※22　郡書記
　郡役所の公務員。
※23　新市街地開削組合
　新市街地を作るため有志が集まった団体。



留萌最初の都市計画図（明治 24 年）



築港（ちっこう）前の市街地

そして、明治24年（1891）10月30日付で北海道長官の許可を得ることができました。

江戸時代からルルモッペ場所の請負人であった栖原家の十一代角兵衛がこの計画に賛成し、留萌村、礼受村、三泊村の三村共有資金(※24)として、畑地１万５千坪(※25)（約５ヘクタール(※26)）、五十嵐綱治が所有地13万坪（約43ヘクタール）の寄附を願い出たことから、北海道庁は実現性の高い計画として認めたのです。

これも、港湾都市としての留萌の将来を見据えて考えられた計画でした。



※24　三村共有資金
　三つの村で共同で使う金銭。

※25　坪
　尺貫法の単位　１坪＝約3.3㎡。

※26　ヘクタール
　１ヘクタール＝約3,030坪＝約10,000㎡。

また、明治 23 年（1890）には、札幌農学校(※27)教授の広井勇博士も北海道庁の依頼を受け、留萌の現地調査を行い、留萌での港作りの必要性を報告しています。

新市街地造成計画の許可と共に、綱治を始め留萌村の有志たちをどんなに勇気づけたことでしょう。



留萌港修築平面図

※27　札幌農学校
後の北海道大学。

国会への請願

翌明治24年(1891)、暮れもおしせまった12月22日、留萌の有志の五十嵐綱治、長尾甲斉（医師）、伊山徳次郎（留萌村戸長）、倉光吉郎の姿が東京上野駅にありました。

留萌から船で増毛、小樽を経て、青森に着き、青森からは９月１日に開通したばかりの東北本線で汽車にゆられ、片道10日間の旅でした。

今回の上京の目的は、12月26日から始まる「第２回帝国議会(※28)」で、国に留萌築港(※29)をお願いするためでした。

※28　帝国議会
　日本初の国会。
※29　築港
　港を作ること。

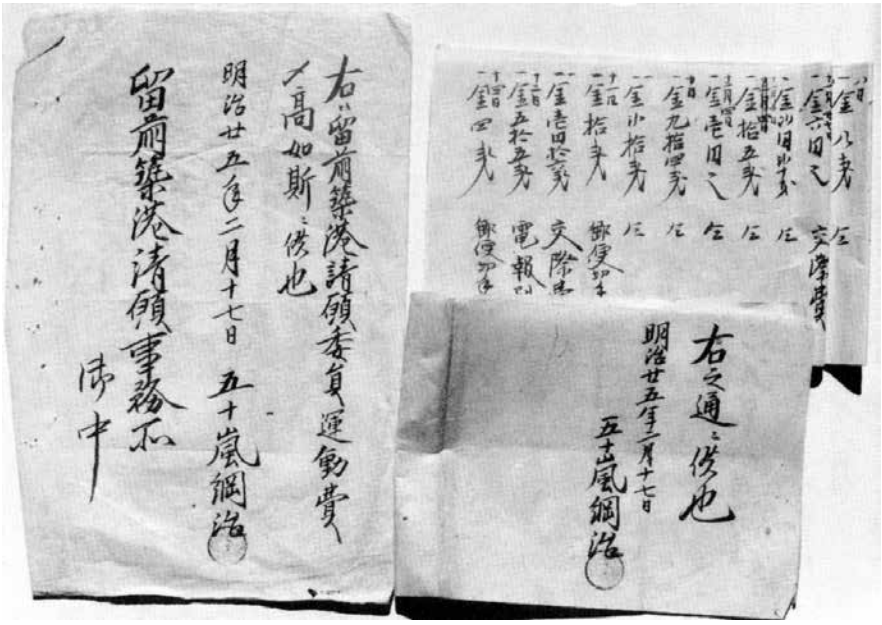
しかし、第２回帝国議会は 12 月 25 日、海軍予算の大幅削減が可決(※30)されたため、大荒れとなり、政府は議会史上初めての解散をしました。

そのため、この第１回の留萌築港の請願は叶えられなかったのです。

正月を東京で過ごした綱治らは、１月 10 日に上野駅を発ち、留萌に帰っていきました。

※30　可決
　国会で法律の案が多数決で決まること。

ただ、大日本帝国憲法(※31)ができてまだ２年、北海道議会などの地方の議会制度(※32)も整っていなかった明治 24 年（1891）に、人口 2, 200 人ほどの小さな村に過ぎない留萌に住んでいた人たちが、このような行動を取ったことは、ただただ驚くばかりです。



築港請願運動費の請求書（明治 25 年）

※31　大日本帝国憲法

日本初の憲法（国の基本を示す最高の法律）。

※32　議会制度

国会や都道府県議会、市町村議会を行うための約束事。

この第１回留萌築港請願に使われた費用は、交通費、宿泊費、設計図製作費、その他みやげ代など総額536 円41銭(※33) ８厘（現在の 700 万円以上）で、その大半を五十嵐、佐賀、中川などの留萌の資産家(※34) が出したお金でまかなわれたと考えられます。



明治 26 年当時の留萌村の資産家（実業人名録）

※33　銭、厘

明治から戦前までのお金の単位。1 円＝100銭、1銭＝10厘。

※34　資産家

財産をいっぱい持っている人。

築港運動の継続と綱治の遺言(※35)

その後、留萌築港運動は明治 27、28 年（1894、1895）の日清戦争(※36)などがあり、表だって運動を行うことができませんでした。

しかし、綱治は仕事などで東京に出た機会に関係するところを回り、留萌に港を作ることの必要性を説明していました。

また、水産伝習所を卒業して家業の漁業を手伝っていた億太郎も、父綱治と共に北海道庁などを何度も訪ね、北海道庁技師(※37)として小樽築港に関わっていた広井勇博士とも連絡を取りあっていました。

※35　遺言
亡くなった人が家族などに残した言葉。

※36　日清戦争
日本と清（中国）との戦争。

※37　技師
技術者の呼び名。

明治30年(1897)に北海道長官に就任した園田安賢は、留萌築港の強力な応援者となり、五十嵐家と関係を深めていきました。

億太郎の次男安綱の名前は、園田安賢の安と綱治の綱から名付けられたといわれています。

明治33年（1900）になると、当時、留萌地方で一番大きな町だった増毛が、港をつくる運動の中で大きなライバルとして立ちはだかってきます。

増毛に築港をとられたら大変ということから、綱治をはじめ留萌の有志たちは「留萌築港期成同盟会(※38)」を作り、12月には、帝国議会へ２回目の請願をします。

※38　留萌築港期成同盟会
　留萌港を作るために集まった人たちの団体。

このとき初めて億太郎も実行委員となり、東京で運動をくり広げました。

翌年も第３次請願を行います。

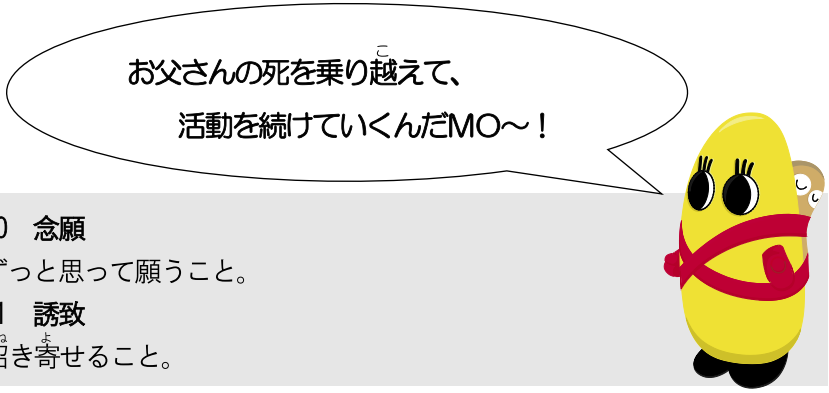
しかし、先頭に立っていた父綱治は、明治 36 年（1903）９月 18 日に札幌の病院で亡くなります。56 才でした。

綱治は死を悟った時(※39)、億太郎をそばに呼んで、次のように言い残しました。

※39　死を悟った時
もうすぐに自分が死ぬと考えた時。

「わが五十嵐家は漁業を基として今日あることができた。みな、郷土留萌のおかげだ。自分も明治 24 年の帝国議会に留萌築港の請願を町の有志と共に始めてから、土地 13万坪（約 43 ヘクタール）を寄附して市街地を作り、住みよい留萌を築くように念願(※40)してきたが、病気には勝てない。鉄道も港湾もこれからである。お前も水産伝習所を終了しているから新しい漁業をおこし、私の考えていたことを立派にやりとげてくれ。」

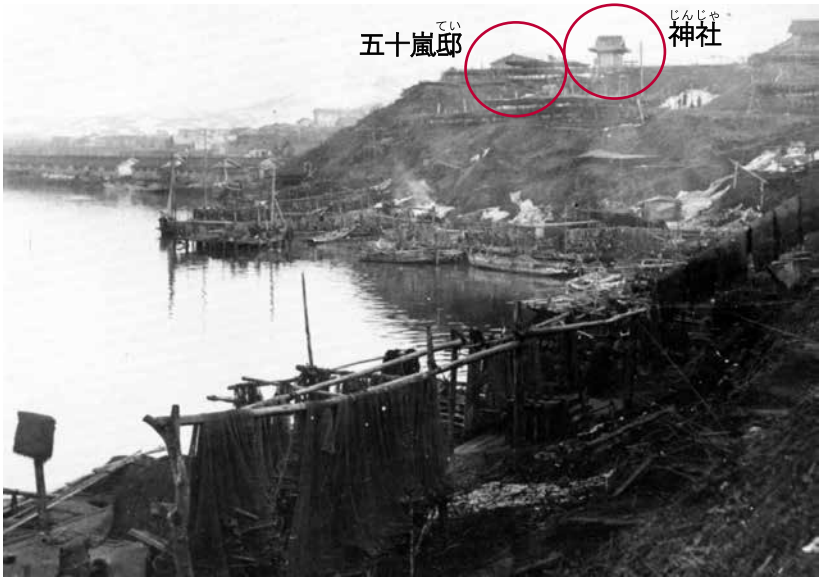
この綱治の遺志を継ぎ、億太郎は留萌への築港誘致(※41)に向かっていくのです。



※40　念願
　ずっと思って願うこと。
※41　誘致
　招き寄せること。



明治 35 年留萌港明細図　五十嵐邸の場所がわかる



築港前の南岸　五十嵐邸と神社が見える



五十嵐邸前にて

増毛との争奪戦(※42)

C･S･メークは増毛の港湾も調査をし、漁港としては認めていますが、留萌に期待した商港としての可能性は否定しています。

しかし、メークが調査した明治 20 年（1887）頃、留萌は戸数300戸、人口 800 人でしたが、増毛は戸数800戸、人口が 4,700 人で郡役所、警察署、郵便局、弁才船(※43)が入る良い港があり、天塩地方で経済・行政の中心でした。

当時の増毛の人たちは、「なぜ増毛ではなく、留萌に港を作るのか」と疑問に思った人が多かったと思われます。

※42　争奪戦
　争って奪い合うこと。

※43　弁才船
　江戸時代から明治時代まで使われた日本の船の形。北前船ともいう。

また、この頃はできたての政党の対立も激しくなり、留萌には与党の政友会、増毛には憲政党などの野党がつき、国会で大論争となりました。そんな中、億太郎は明治37年(1904)の第２回北海道会(※44)議員選挙に立候補し、当選します。当時の北海道長官園田安賢や、後に道会議員から代議士になる東武などと親交を深めたのでした。



北海道会議員時代(前列右から五番目が億太郎)

※44　北海道会
現在の北海道議会。

日露戦争(※45)が始まったことなどで増毛との論争も一時は納まりましたが、戦争が終わると、天塩沿岸で測量(※46)にあたっていた海軍水路部(※47)の測量艦「武蔵」が増毛に寄港した時、増毛の有志が艦長を説得し、国会への請願書に「増毛を有利とする理由」という海軍の意見書をつけて提出しました。

増毛に、日露戦争でバルチック艦隊を破った飛ぶ鳥を落とす勢い(※48)の帝国海軍が味方についたのです。

※45　日露戦争

明治 37 年（1904）から明治 38 年（1905）までの日本とロシアとの戦争。

※46　測量

地図や海図を作るために地形をはかって記録すること。

※47　海軍水路部

海図を作るための海軍の一機関。

※48　飛ぶ鳥を落とす勢い

空を飛ぶ鳥をも落としてしまうくらい勢いのすごいこと。

増毛の勢いはさらに増し、留萌にとっては衝撃的(※49)なダメージとなったのでした。

しかし、億太郎たち留萌の有志は帝国議会に証人として、港湾土木学会の権威で東京帝国大学教授になっていた広井勇工学博士を送り込み、留萌が港を作る場所として有利なことを学問的に応援させ、明治 39 年（1906）の第 23 回帝国議会で衆議院を通過させますが、貴族院(※50)で否決(※51)されました。

※49　衝撃的

心を強く動かされるさま。

※50　貴族院

大日本帝国議会は貴族院と衆議院の二院制をとっていた。
貴族院は選挙ではなく、天皇の任命によった。

※51　否決

国会などで法律案などを認めないこと。

そこで、明治40年（1907）８月、当時政友会の実力者で、内務大臣(※52)の原敬（後の総理大臣）が北海道に来た時に、留萌に呼び、現地を視察してもらいました。

億太郎は、小樽まで自分の船「三省丸」で原敬の一行を迎えに行き、一度増毛に上陸して増毛町有志で開いた歓迎会で昼食をとった後、再び乗船し、１時間ほどで留萌に着きました。

小舟に移り、汽船に引っ張られて留萌川を１里(※53)余りさかのぼって視察した後、園田商会(※54)に宿泊しました。

※52　内務大臣
戦前の旧内務省を率いた国務大臣。

※53　里
尺貫法による長さの単位。１里＝約3.9㎞。

※54　園田商会
留萌川の南岸河口部に位置し、栖原漁業部から三井漁業部となり、園田商会へと移り変わってきた。

その時に一緒にきたのは、水野錬太郎・安達謙三（政治家）、広井勇（東京帝国大学教授）、河島醇（案内役北海道庁長官）ほか13名で、有島武郎（「カインの末裔」などで知られる小説家）もその中にいました。



原　敬



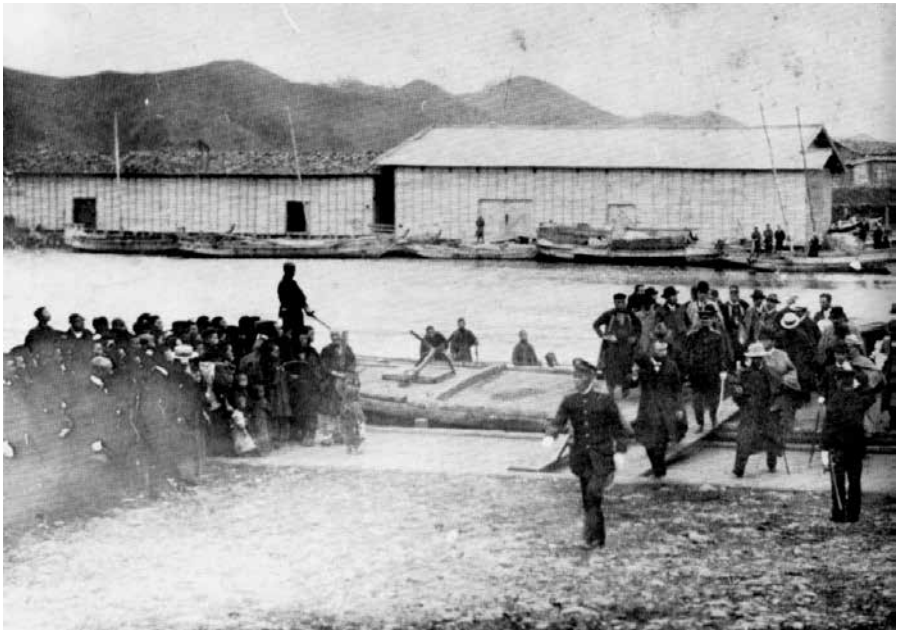
広井　勇

原敬は、その日の日記に次のように書いています。

「増毛・留萌は貴族院で問題となって、留萌の港作りの予算は否決された。これは、頑固(※55)で新しいものを受け入れない人たちが、ただ感情的に私に嫌がらせをしているだけだ。どちらが良いか悪いかははっきりしていて、増毛湾は悪いところはないが、内陸との連絡が難しく、鉄道を設置することも難しい。そうすれば、留萌は増毛より数段優れている。」

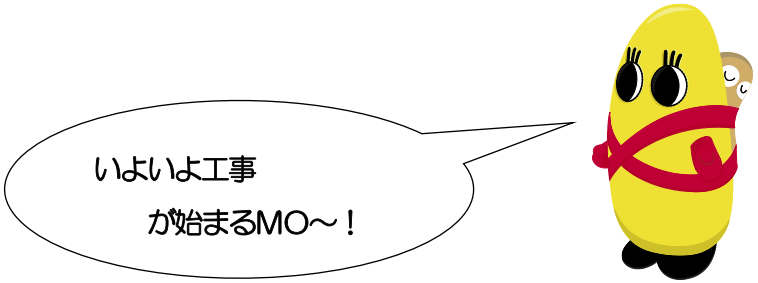
原敬の心の中では、すでに留萌に港を建設することを決めていたと思われます。

※55　頑固
かたくなで、なかなか考えを変えないこと。



留萌に着いた原敬の一行

明治 43 年 (1910)、留萌の築港請願から足かけ 20 年、やっと留萌築港が帝国議会で可決され、翌年から工事が始まりました。



鉄道建設

留萌築港運動と共に北海道の空知地方と日本海側を結び、内陸部の開拓を進めるために、鉄道留萌線を建設する必要がありました。明治 29 年（1896）、北海道鉄道敷設(※56)法ができ、その予定路線の中に雨龍原野(※57)から増毛に到る路線がありました。

しかし、内陸の開拓が進まなかったために、一時、第一期予定路線から外されていました。

明治 38 年（1905）、第 22 回帝国議会で深川留萌間が第一期に編入され、明治 40 年（1907）２月に着工し、明治 43 年（1910）11 月に約４ヶ年をかけて完成します。

※56　鉄道敷設

鉄道を通す線路を引くこと。

※57　雨龍原野

空知地方雨竜町、北竜町などを含む原野。



鉄道開通時明治 43 年の留萌町市街地全図



留萌線深川からの１番列車



億太郎の出迎(むか)え（留萌駅にて）

この留萌線の完成にも、五十嵐家が多大なる貢献をしています。

綱治が存命中から妹背牛留萌間の鉄道建設の動きがあり、資本金110万円（現在の22億円）の留萌私鉄会社を作り、政府に出願(※58)したこともありましたが、鉄道路線の勾配(※59)の問題で許可が出ませんでした。

しかし、勾配が100分の1以下なら国の鉄道として建設できると言われ、二千数百円の測量経費を負担し、改めて測量し直した結果、国の鉄道として着工することとなったのです。

さらに、留萌停車場用地（留萌駅の敷地）1,700坪(5,600㎡)を寄附し、国から金杯(※60)が贈られています。

※58　出願
こうしてほしいと願い出ること。

※59　勾配
水平面に対する傾きの度合い。

※60　金杯
寄附などに対して国などから感謝の意味で贈られた金メッキの盃。

大留萌建設事業と町債(※61)問題

鉄道が通じ、留萌の港の建設も決まりました。

しかし、それだけでは留萌の発展はありません。

留萌にふさわしい市街としての形を整えていかなければならないと共に、港から出す荷物を確保することができなければなりません。

明治 43 年（1910）、億太郎たちがお金を出して作った留萌電灯会社により初めて電灯がともり、電話も通じるようになりました。

※61　町債
　町の借金。

億太郎は翌年６月、東京の高橋是賢（大蔵大臣高橋是清の長男）や野村安太郎ほか３名と共同して、資本金10万円（現在の約２億円）で作った留萌興業合資会社の代表社員となり、築港完成後の企業誘致や、港で取り扱う荷物の種類や量を増やそうとしました。

また、留萌駅周辺の土地は雑草の生えた未開地(※62)でしたが、所有者の毛利公爵(※63)家を高橋に口説かせ、７万坪（約 23 ヘクタール）を 40 万円(現在の約８億円)で買い取り、自分の土地と併せて私費で宅地造成(※64)、区画を整理し、私設水道(※65)も引きました。

※62　未開地

まだ開発されていない土地。

※63　公爵

「爵位」と呼ばれる国への功労者に与えられる名誉称号の中で、最も上位の位を指す。

※64　宅地造成

家を建てられるように土地を整備すること。

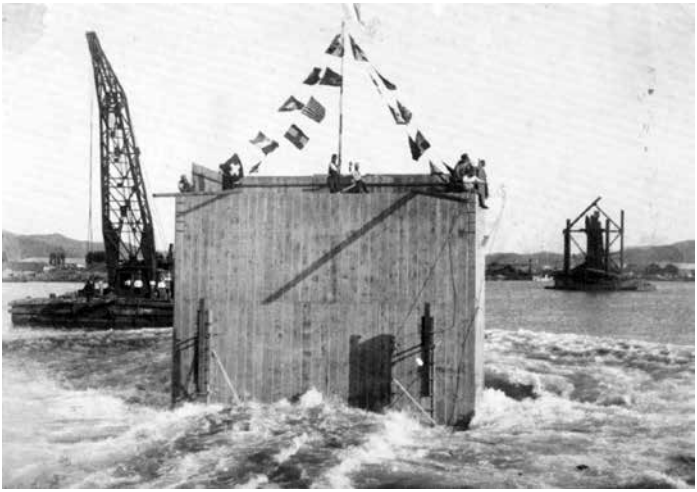
※65　私設水道

民間で作った水道施設。

これが、現在の開運町一帯の始まりです。

しかし、国の予算の問題と、留萌川の運ぶ土砂や冬の波浪による砂のため、工事がなかなか進みませんでした。

そのため、港の利用が進まず、大和田炭鉱、小平炭鉱、峠下炭鉱からの石炭の積み出し(※66)もできない状況でした。



築港工事の防波堤用ケーソンの浸水

※66　積み出し

港から船で他の地方へ運ぶこと。

その上、大正５年(1916)からは築港計画が縮小され、外港(※67)の面積は半分となり、内港も水深が浅くなり港として機能できないものとなっていました。

このため、「留萌港は失敗だ。」「いらない。」「工事は中止すべきだ。」などという声も聞こえるようになってきました。



築港工事の防波堤へのケーソンの据え付け

※67　外港
留萌港は外港、内港、副港の三段式となっている。

しかし、大正７年(1918)、原敬が総理大臣の時に、地元有志により築港工事の予算の大幅な増額と設計変更をしてほしいとの陳情運動(※69)が起こりました。

原敬は内務大臣の時に留萌の港作りを決めましたが、その留萌の築港工事がなかなか進まず、大変なことになっていることを知り、内閣書記官長（現在の官房長官）高橋光威の配下の野本治平を第六代留萌町長に送り込みました。



野本治平

※69　陳情運動

こうしてほしいとお願いする運動。

野本町長は就任するとすぐに、大留萌建設事業を立案しました。

この計画は、留萌港完成後、荷物がスムーズに動くようにするために留萌川を切り替えて、これによってできた埋め立て地で新市街の区画整理を行い、また、雑貨(※70)を扱うための副港を作り、排水溝築設(※71)工事を行うというものでした。

そして、これに必要な費用250万円を全て町債でまかなおうとしたのです。

しかし、一口に 250 万円といっても、現在の約 50 億円にあたり、当時、府や県でさえ、50 万円の借金でも国に認めてもらうことはできませんでした。

※70　雑貨
日用生活品などの荷物。

※71　排水溝築設
水はけを良くするための排水溝を作ること。

ですから、人口 15,000 人ほどの小さな町にすぎない留萌町が250万円もの借金をすることなど、できるはずがないと思われていました。

ところが、この不可能が可能になったのです。

野本町長は就任以来、ほとんど東京にいて、東奔西走(※72)し、その熱意は政財界を動かし、大正 10 年（1921）、町債250万円は帝国生命(※73)ほか 13 の保険会社から借り入れることに成功し、国（内務省）も大留萌建設事業を認めたのです。

大留萌建設事業は、大正 11 年(1922) 4 月に着工し、大正 13 年(1924)12 月に完成しました。

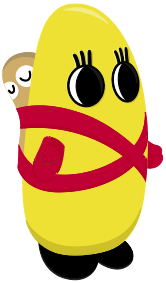
※72　東奔西走
仕事や用事のため、東へ西へとあちこちに忙しくする様子。

※73　帝国生命
現在の朝日生命保険会社。

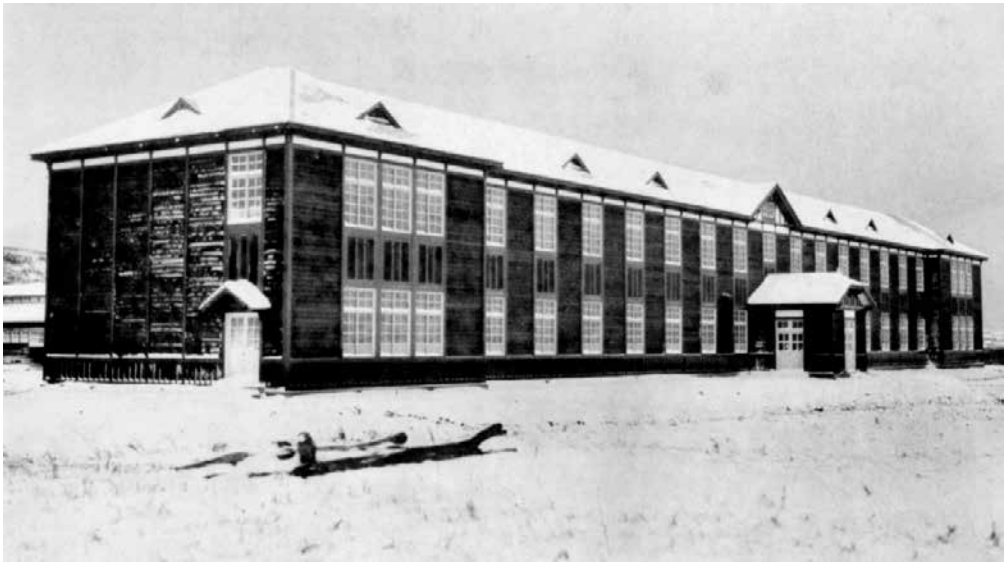
大留萌建設事業の主な事業は、郵便局の新築、旧制留萌中学校の建設、港への給水のための水道施設の建設、雑貨を扱う副港の建設でした。



留萌郵便局







町立留萌中学校



留萌港副港（ふっこう）



水道の噴水試験（ふんすいしけん）

しかし、順調に見えたこの事業も、後に大問題となりました。

期限までにこの借金の返済ができなくなったのです。

というのは、世界的不況(※74)による国家財政の悪化と、突然起こった関東大震災(※75)の影響で、築港工事の工事費の配分が大幅に減らされたことにより、工事が遅れ、留萌川の埋め立てによって造成された土地が売れなかったからです。

このため、留萌町は世間から信用をなくし、国会でもとりあげられ、大問題となったのです。

※74　不況
経済活動に活気がないこと。

※75　関東大震災
大正 12 年（1923）関東一円で起きた地震による大災害。

当時の荒木町長(※76)が、これを苦に自殺するという事態になりました。

しかし、この借金は町民には負担のかからないように計画されていました。借金を返す財源は、留萌川を埋め立てて作られた土地の売却代金(※77)と入港税(※78)だけに限定され、町民の税金から払うことはできなかったのです。

そのため、お金を貸した生命保険会社は、土地が売れるまでいつまでも待たなければなりませんでした。

億太郎は、留萌町会議員として留萌町の運営にあたっており、心労は絶えなかったことと思われます。

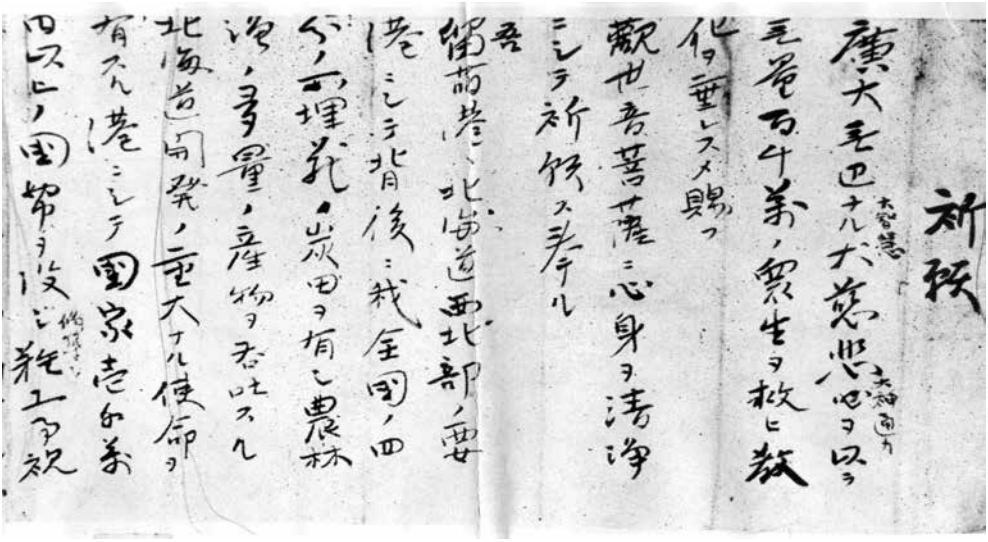
※76　荒木町長
第７代留萌町長荒木正澄。

※77　売却代金
土地を売ったお金。

※78　入港税
船が港に入るときに納める税金。

そのため、信心(※79)深かった億太郎は昭和２年(1927)11月25日、浅草観音(※80)に長文の祈願文を捧げて、観音様に助けを求めています。

これが功を奏したのか、昭和８年（1924）に留萌港が完成し、土地が売れたため、翌９年(1925)には円満解決しました。



浅草観音への祈願文の下書

※79　信心
神様、仏様への信仰心が強いこと。

※80　浅草観音
東京都台東区浅草２丁目にある浅草寺。

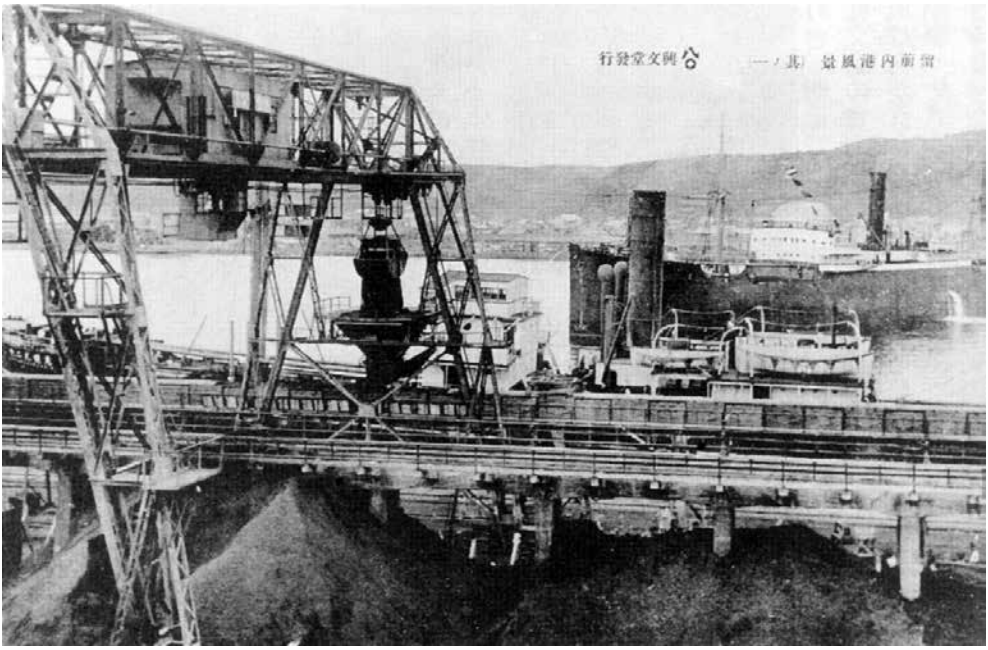
留萌鉄道桟橋会社の設立

留萌港完成の目途は立ちましたが、完成後、港に船が入れば、荷物を動かさなければなりません。億太郎は、荷物を確保するためには内陸部を開発し、産業をおこさなければならないと考えました。

また、港湾を機能させるためには、石炭ローダー(※81)などの荷役設備、倉庫、留萌駅から港までの臨港鉄道などが欠かせないと考え、大正15年（1926）、資本金15万円（現在の約３億円）で留萌の有志と共に「留萌海陸連絡会社」を作り、９月に上京し、丸の内(※82)の藤田組の２階に「留萌鉄道桟橋会社創立事務所」の看板を掲げ、運動を展開していきました。

※81　石炭ローダー
石炭を船に積み込む器械。

※82　丸の内
皇居と東京駅に挟まれた地区で、日本の経済の中心として発展した。



留萌港南岸の石炭ローダー

留萌町債の償還

延期嘆願に對し生命保險側強硬

【東京二十七日發電】生命保險會社は從來主として地方公共團體の金融の上に力を盡して來たのであつたが大正十年六月北海道留萌町築港起債として內務省認可の下に應じたる町債は藥莱、帝國、朝日、太陽、福壽、國光、常盤の入組引受にて金貨二百四十九万五千圓利息年一割返濟期日大正十四年三月三十一日であつたが豫定の如く起債工事の進捗せざると財界不況のため土地の價格下落等より本年三月末の償還期日來るも利息さへも支拂ひ得ざる狀態となれるも今では財政頗る困難を告げたので最近更に延期を實施したが此際同社をして安堵とすべしとの强硬なる意見に出で再三返濟方請求するも未だ之に應ぜず玆に此問題の解決如何は保險會社の地方公共團體に對する今後の投資問題の上に關する重大なる意義を有するものと一般に注目されてゐる

町債問題を報道する新聞記事

しかし、時代は世界恐慌(※83)の最中であり、留萌の町債問題を棚上げにして、さらにこの会社に出資するように説得して回るのですから、なかなかうまくいかず、大変な苦労であったと思われます。

ただ、億太郎の信念だけが気力を持続させていたのです。

昭和２年（1927）１月末、億太郎から伊佐津和平（町会議員）の所に東京に来てくれるように電報が来て、かねてから億太郎の指示により作ってあった留萌のＰＲ映画「蕾の留萌(※84)」を持って急いで上京しました。

２月５日、創立事務所に集まったのは、日本の有力企業の重役たちでした。

※83　世界恐慌

昭和４年(1929)アメリカウォール街の株下落に始まる世界的な景気の後退で、日本でも企業の倒産など不景気が続いた。

※84　蕾の留萌

市立留萌図書館で見ることができる。

留萌の町債問題を抱えた生命保険協会から 13 社、明治鉱業、浅野、三菱、炭鉱汽船住友と旧財閥(※85)系の企業の社長や重役たちです。

また、立会人として、北海道港湾課長伊藤長右衛門、調査課長橋本東三らが同席しました。

伊佐津の作成した「蕾の留萌」を上映しながら、会社の必要性を訴えたのです。

しかし、当時の経済状況は最悪で、なかなか事業を進めることはできませんでした。

ただ、億太郎はひるむことなく、中央財界の代表に何度も集まってもらって、「会社設立」の説明会を開き、関係の会社を訪ねては必要性を説いて回りました。

※85　財閥
家族または一族による親会社を中核としてその配下に多くの企業を抱える企業集団。

そんな時、当時の若槻礼次郎首相、鈴木喜三郎政友会総裁と会うことができ、その紹介で経済界の実力者だった男爵(※86)の郷誠之助(※87)と知り合い、会社設立と留萌町債問題解決について、協力をする約束を取り付けることができました。

すると、会社設立に向けていろいろな障害となっていたことがうまく取り除かれ、着々と設立に向けて進んでいきました。

昭和３年（1928）３月15日、郷男爵が議長となって東京の工業クラブで会社設立発起人会が開かれ、翌４年３月開催の設立総会を経て留萌鉄道桟橋株式会社は発足し、億太郎は監査役として重役となりました。

※86　男爵
爵位には、「公爵」「侯爵」「伯爵」「子爵」「男爵」の５爵があった。

※87　郷誠之助
実業家。日本商工会議所会頭を歴任。貴族院議員。

会社は資本金250万円(現在の約50億円)。

本社を東京都京橋区銀座７丁目５番地に置きました。

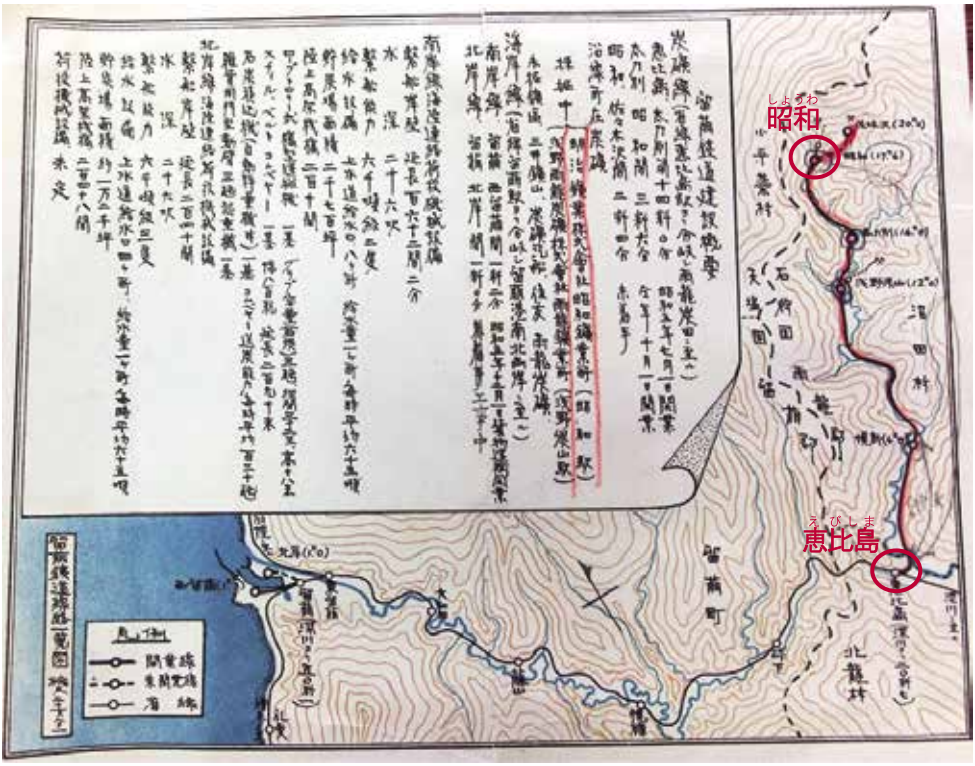
株主名簿には、宮内省(※88)1,000株、安川10,000株、浅野10,000株、三井3,500株、北炭3,500株、住友2,500株、大倉2,500株、三菱2,500株、生命保険協会10,000株などの名前があります。



昭和５年留萌鉄道開通記念

※88　宮内省
宮内庁の前身。皇室に関することを行う。

会社設立から１ヶ月後には、恵比島から昭和間の鉄道工事に着工し、昭和５年（1930）８月には完成し、営業を開始しています。



留萌鉄道予定路線図（恵比島～昭和）

億太郎死す

しかし、億太郎の体は、それまでの心労から大きく蝕まれており、昭和４年（1929）12 月、仕事で大阪に来ていた時に倒れて大阪病院に入院し、暮れもおしせまった 29 日に、多くの人たちの祈りも届かず天に召されていったのです。偶然にも、綱治と同じ 56 才でした。

億太郎の葬儀は、昭和５年(1930) １月９日、町葬(※89)として、留萌小学校（現在の留萌小学校のグラウンド側にあった）で行われました。

※89　町葬
　町が主催者となって行う葬儀。

また、告別式で各会代表から多くの弔辞(※90)や弔電(※91)がよせられたのは、言うまでもありません。



留萌小学校での億太郎の町葬の様子

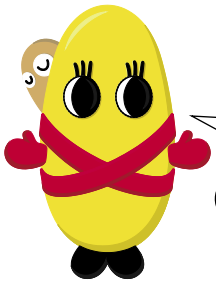
※90　弔辞
故人と関係の深かった人が、故人を弔うために葬式で述べる文章。

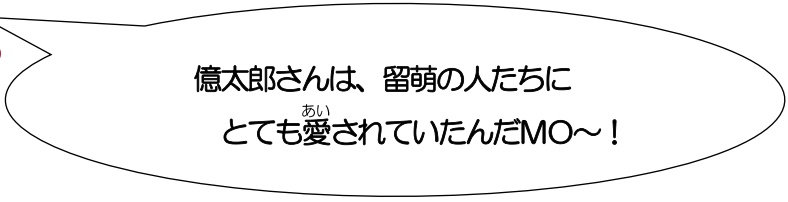
※91　弔電
故人を弔う電報。

この日は、年末から何日も続いていた大吹雪もおさまり、雲一つない晴天となり、五十嵐邸から式場の留萌小学校までの道には、多くの町民が見送りに出たそうです。



億太郎の葬列





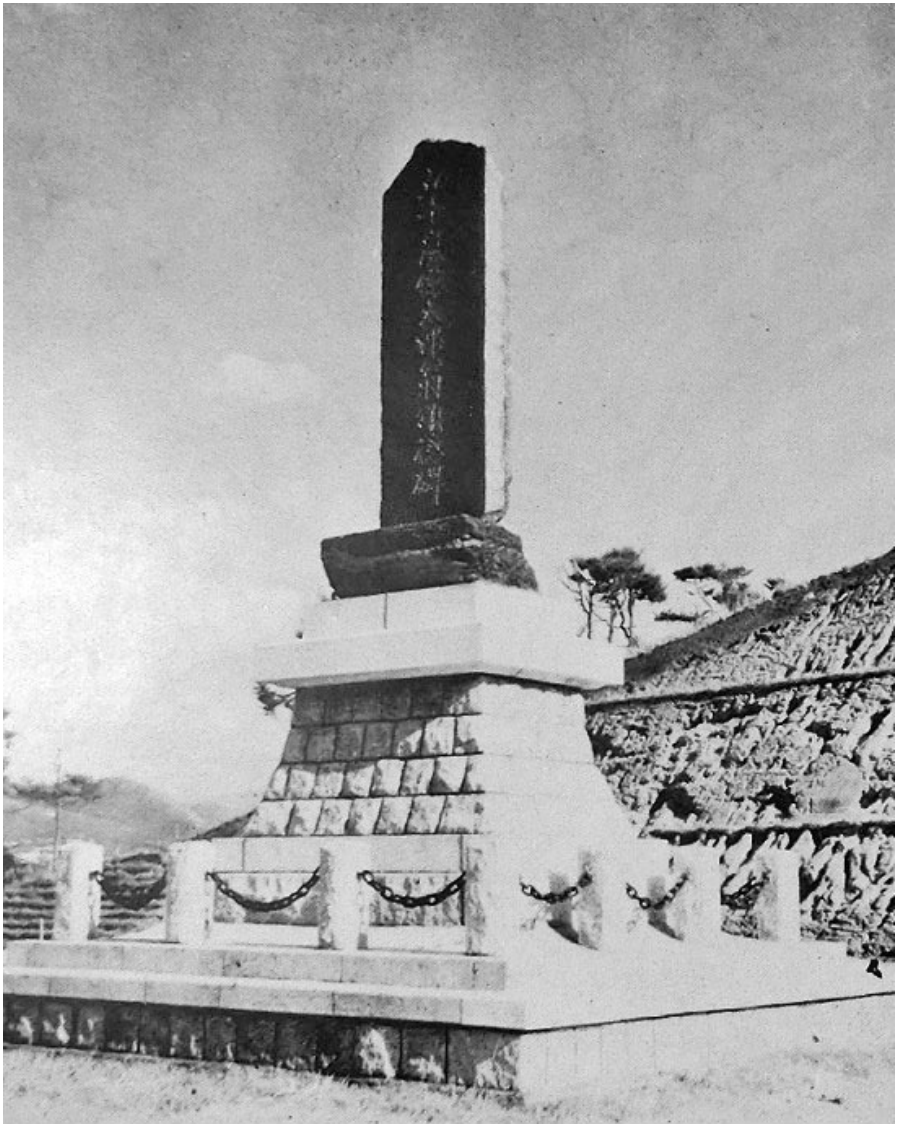
その４年後、養父綱治と億太郎、五十嵐家二代の命をかけた留萌築港は、連絡鉄道の整備と共にやり遂げられました。

綱治、億太郎親子が築いた留萌港の利用は、その後、日本が戦争へと突き進んでいったために落ち込んでいましたが、戦後やっと、昔の賑わいを取り戻しました。

昭和 25 年（1950）11 月３日文化の日に、故五十嵐億太郎を第一号の「市制特別功労者」として表彰し、昭和 40 年（1965）には「名誉市民」の称号を贈っています。

また、昭和 28 年（1953）10 月には「頌徳碑」を見晴公園内に建立し、昭和 43 年（1968）には億太郎邸にあった神社を壊し、「湊神社(※92)」を新築し、億太郎を神としてお祀りしました。

※92　湊神社
社殿の老朽化により、ご神体は留萌神社に移したため、現在はない。



五十嵐億太郎頌徳碑（しょうとくひ）

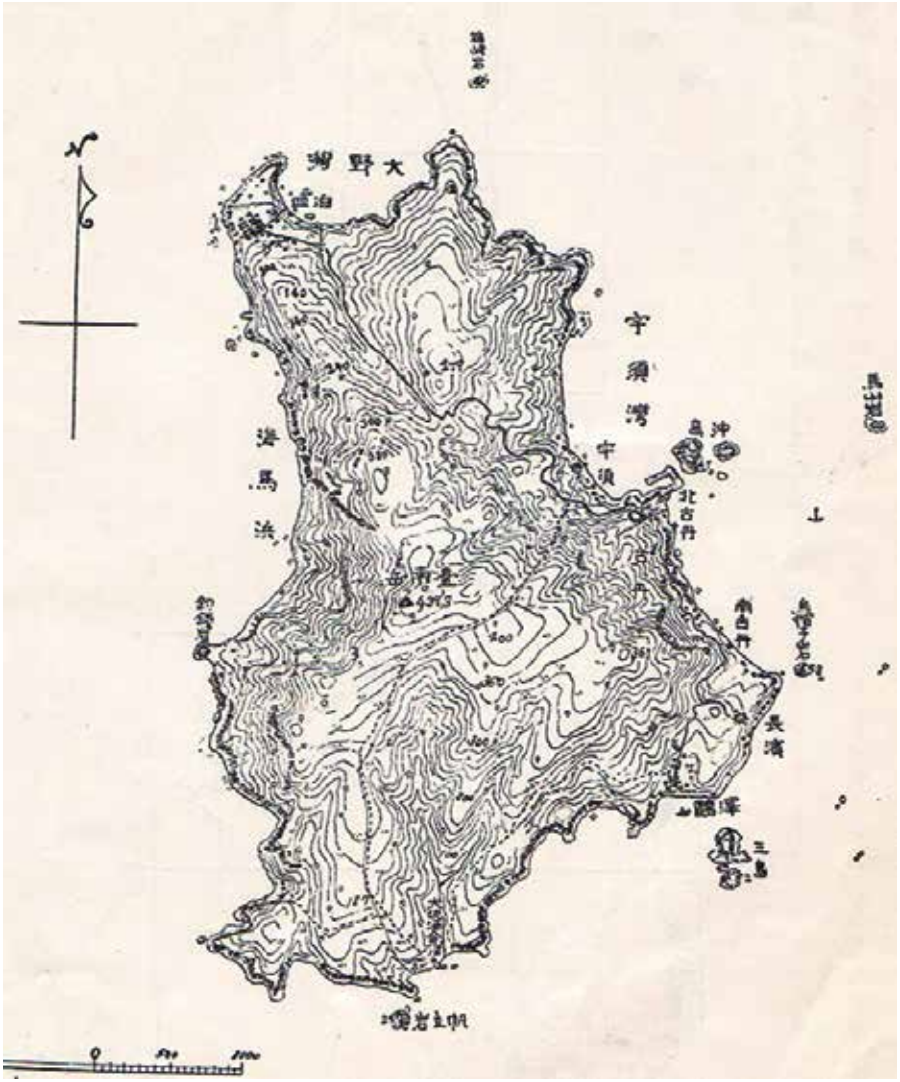
余録（よろく）

サハリン（樺太（からふと））の西の海上にロシア名モネロン島という小さな島があります。

日本領（りょう）のときは海馬島（かいばとう）といいました。



海馬島（かいばとう）の位置



海馬島の地図

日露戦争の時に、この小さな無人島を億太郎が有志と共に無血占領(※93)し、日本の領土となった後、ニシン漁業を行いながら村作りを積極的に行いました。

神社や学校などの公共施設の整備や、自分の事業に投資した経費は、約 70 万円（現在の 15 億円以上）にのぼるといわれます。

しかし、事業の収支が見合っていたわけではありません。年々ニシンも獲れなくなり、資金の回収は思うようにいかなかったらしいのです。

※93　無血占領
犠牲者を出さずに領土を占領すること。

ただ、億太郎の海馬島にかける情熱は、採算を度外視(※94)して、亡くなるまで続けられました。

大正11年（1915）には、この島が海馬村として村制がしかれ、億太郎はいつしか「海馬島王」と呼ばれるようになっていました。

この海馬島の開発に功績があったことで、大正14年（1918）8月12日、樺太の視察に訪れていた摂政宮殿下(※95)（後の昭和天皇）のお召艦が海馬島の五十浦湾にお立ち寄りになりました。億太郎を艦上に呼び、海馬島の状況をお聞きになり、お菓子を下賜(※96)するという、当時の国民としては最高の栄誉を与えられたのです。

※94　度外視
問題にしないこと、無視すること。

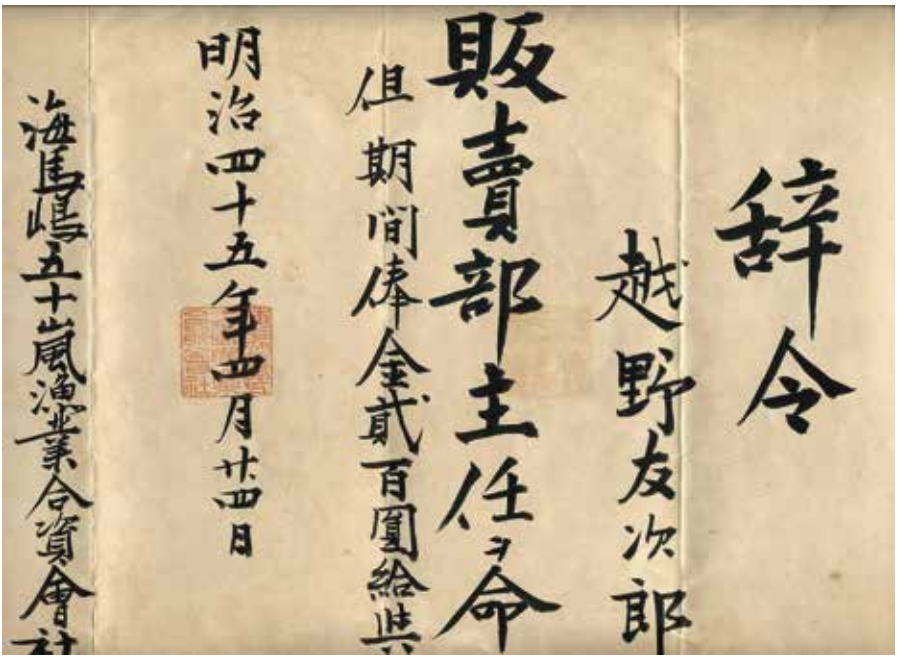
※95　摂政宮殿下
天皇が病気などで公務ができないときに、天皇の代理を務める皇太子。

※96　下賜
天皇など身分の高い人が、身分の低い人に物を与えること。

いただいたお菓子は同じ形のものを作り、海馬島民に配り、みんなでその栄誉を分け合いました。

その他、朝鮮でもニシン漁を手がけましたが、億太郎の死によって全てが幻となったのです。

海馬島は、昭和20年（1945）の終戦により、旧ソ連領（現ロシア領）となり、現在は再び無人島となってしまいました。



海馬島の五十嵐漁業合資会社の辞令



海馬島五十嵐漁場



海馬島五十浦湾に停泊する摂政宮お召艦

おわりに

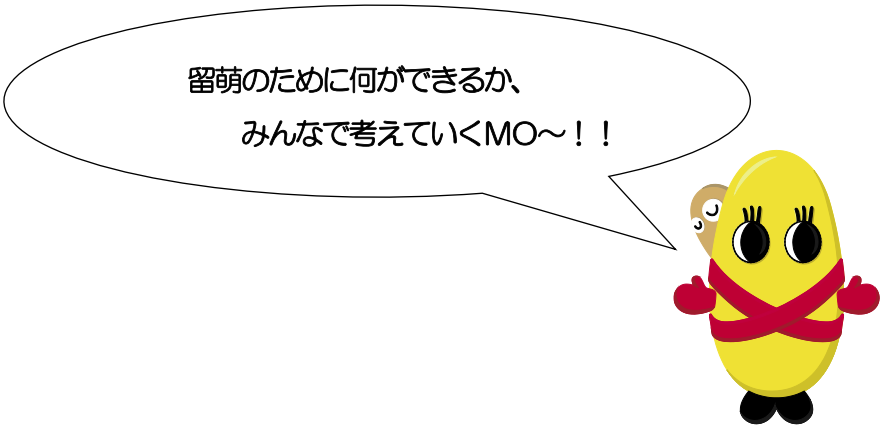
留萌が将来どんな風に変わっていくのか、まだ未来予想図が描けていない頃、ニシン漁は最盛期であり、五十嵐綱治、億太郎親子には黙っていてもお金が入って、裕福に暮らすことができたはずです。

それなのに、C・S・メークの提案があったとはいえ、ニシン漁で手にした私財を惜しげなく使って、留萌の発展に向かって突き進んだのです。

彼らは、私たち留萌人にとって最大の恩人と言っても過言ではありません。

また、この親子と一緒に活動した留萌の先人たちが示した、留萌の建設にかけた情熱と行動力には、凄まじいエネルギーを感じると共に、ただただ敬意を表するだけです。

この先人たちの想いを現在に生きる我々留萌人が受け継いで、今後の留萌の未来予想図を描き、それに向かって行動を起こしていくことが、先人たちに対する恩返しではないでしょうか。



あとがき

五十嵐億太郎の足跡をたどっていく時に、多くの方々に資料の提供などでお世話になりました。

五十嵐家の子孫の武田博子氏とご主人の秀一氏、親戚筋にあたる佐賀平一郎氏、相馬丈夫氏、億太郎の妻女里宇さんの実家の末裔にあたる本浜恵子氏には色々とご協力をいただきました。

また、旧五十嵐家菩提寺宝国寺住職菊地瑞章氏、大畑小学校教頭大島忍氏には、大畑の調査の際、お忙しい中ご対応をいただき、感謝申し上げます。

この本が留萌市民の五十嵐綱治、億太郎の業績を未来永劫語り継いでいくための一助になることを願ってやみません。

著 者 識

【主要参考文献】

C・S・メーク　HOKKAIDO　HARBOURS　北海道庁　1889

原敬　原敬日記　原奎一郎編　原敬日記三所収　1951

橋本東三　拓殖後日譚　1961

栄井直蔵　ここに郷土あり　1970

留萌市　留萌市史　1970

北海道開発局　留萌港史　1976

近藤清徹　郷土留萌建設の先覚者　五十嵐億太郎
　留萌市特別功労者　故五十嵐億太郎建設期成会　1984

福士廣志　留萌いまむかし
　留萌市開基百二十年・市制施行五十年・開港六十年記念事業
　実行委員会　1997

留萌市　新留萌市史　2003



現在（げんざい）の留萌市街地

留萌百年物語

五十嵐億太郎物語

発　行　日　平成２９年３月１０日
編　　集　留萌市教育委員会
著　　者　福士　廣志
発　　行　留萌市教育委員会
表　　紙　デザインスタジオ Aim
印刷・製本　白鴎印刷株式会社